

青年詩人・山田初男とその作品

山 本 歩

はじめに

山田初男（一九〇七年～一九二九年）は関西学院に在籍し、「木曜島」「文藝直線」をはじめとした同人誌に参加し、詩を寄稿した青年である。一九二七年後半から一九二九年にかけて、他の同人が次々とプロレタリア文学的作品を発表しあるいは運動に身を投じていく中で、山田だけは歩調を合わさず非プロレタリア的傾向を維持し続けた。故に左傾化著しい「木曜島」「文藝直線」においては特異な立場にあり、プロレタリア文学運動を相対化し得る人物である。それとともに、その二十二年の生涯を自殺という形で閉じている彼は、当時の文学状況・青年文化の暗い一面を教えにくれる。

同人誌「木曜島」「文藝直線」については、その左傾化を軸として前号拙論⁽¹⁾で述べた（拙論は以下「前論」と表記する）。その際、山田初男にも触れ、彼の生涯と作品について紹介したが、今回はその詩作品を中心として、より詳細に見ていきたい。

その略歴についても既に紹介しているが、改めて「五人」第四号（一九三〇年五月）に掲載されたものを引用してお

きたい。

明治四十年八月六日大阪天王寺に生る。

四才にして父親逝去し、ついで母親にも離別す。

大阪市西六尋常小学校を経て大阪商業学校へ入学、実業学校の無味乾燥は感情多感なりし彼を極度に押しつぶしたが、当時は又最も得意の時代にして、弁舌に放談に一校の人気を集め、詩作、大阪在住詩人との交流は既にこの時に始まり、清二郎なるペンネームを用ふ。

関西学院入学後、寄宿先の叔父一家と共に阪急沿線曾根に來り、「5人」同人との交友なり、昭和四年三月同誌創刊。

昭和四年五月十八日夜、大阪の一料亭に於いて「某誌」同人と会食中、秘かにカルモチンを服毒し、翌十九日午前四時死去。
二十三歳。

「一料亭」とは大阪の一柳という料亭、「某誌」同人とは岡田正雄⁽²⁾を指す。この岡田から山田は主に恋愛のことでからかわれていたようであるが⁽³⁾、詳細はわからない。山田の自殺は一九二九年五月二十日の大阪朝日新聞によれば失恋によるものとされるが、同人たちの多くは家庭の問題（孤児であること、養父である叔父が冷たいこと等）を指摘する他、文芸思想上の問題（周囲の左傾化についていけない、「ブチブルインテリゲンチヤ」であったこと）を特に重要な原因としている⁽⁴⁾。もつとも失恋・家庭問題・文芸思想問題は複合的に自殺の要因を作っていると考えられるし、同人たちが山田の死に〈夭折の詩人〉というステレオタイプなイメージを抱き殊更に美化している可能性もある。しかし自殺の原因としてどの程度の比重を持っているかはさておき、山田が左傾化する同人誌の中で孤立していったことは確かであり、そして孤立したままこの世を去ったことも事実である。また前論でも述べたように、彼は自分に「イズム

がない」ことに苦悩していた。この悩みは書簡にも書かれているため確からしいことである⁽⁵⁾。この孤立と苦悩が彼にもたらしたものは何かを、一章では主に彼の詩を中心として読み解いていく。次いで二章では彼の詩の特徴を問題とし、山田初男の詩人としての位置付けと評価を試みたい。

今回も同人誌は関西学院大学の学院史編纂室に所蔵してあるものを使用した。

また、末尾に山田初男の作品一覧を添付する。随時参考にしていたきたい。なお、ここで挙げた同人誌及び作品は、現時点において学院史編纂室で発見できる限りのものである。実際は「文藝直線」七号、「脱穀」一〜四号、「花嫁」一号などの所蔵が確認されておらず、従って作品一覧にも穴があることはあらかじめご理解いただきたい。

一、詩から見る山田の苦悩

山田初男の詩作品を初期から順に眺めていくことで、その心境の変化を明らかにしたい。

「木曜島」以前の山田の詩は「脱穀」第五号（一九二七年五月）で確認できる。「支那楽」「新月」「月夜」はそれぞれ、サトウハチロー、北川冬彦、草野心平に贈られたもので、いずれもこの頃新進の詩人であった。山田自身が彼らと交流を持っていたかは不明であるが、サトウと草野は共に「銅鑼」⁽⁶⁾同人であって、関学の先輩である坂本遼を通して「銅鑼」を読んでいたことは間違いないだろう。山田の、文芸状況に敏感な面が伺われる。この三作と「木曜島」一号（六月）発表した「淋しいのです」「淀川」は二〜六連の短詩である。他の多くの同人と同様、竹中郁の影響であろう。

「木曜島」二号（十月）の「華麗なる詩人へ」は十五連のものである。内容は「天ぷら派」「衣だけ」の天ぷら学生もしくは詩人）を非難するもので、ここからは他の同人誌（あるいは商業誌）に強い反感を持っている様子が見える。

三号（十二月）には、左翼芸術と左翼芸術団体への拒絶を示した「或る左翼藝聯へ」の他、「冬へ」を掲載している。「どうせ来る汝なら／狂人みたいに抱きこんでやろう！／俺のばかげた恋の破片を／思いきり凍らせて蹴飛ばしてくれ！」から始まる。この頃、既に山田は誰かしらに恋をしていたのだろう。翌一九二八年（月日不明）、中原敬三へ送った書簡には次のようにある。

知る、今更に知る。凡ゆる文化價値を凌ぐ此の絶妙なる価値論！ それは若き日の愛！ 文学！その最高峰が歴史的に見て戀愛的であることは何を示唆するか？⁽⁷⁾

恋愛に傾倒し、しかも恋愛と文学を結びつける思考が見られる。「冬へ」に表れた山田の恋に対する姿勢は、決して樂觀的でない。けれども自棄的でありながらもどこか強く、人生の冬に立ち向かっていこうとする前向きさも持ち合わせているのだ。「華麗なる詩人へ」「或る左翼藝聯へ」「冬へ」は毅然とした態度が表された作品である。

しかし、そうした山田の「強さ」の面は、「木曜島」の左傾化に伴って薄れていく。代わりに強調されるのは悲哀と、悲観の一面である。五号（一九二八年二月）には「童謡 村の子供」を發表しており、農村の子どもの悲哀を描いている。形だけは農民詩であり、彼なりにプロレタリアートを描こうとしたのであろうが、他の同人の、例えば同号の西村欣二の詩「小工場労働者よ塵をはたけ」にある「俺は一時金五拾圓と片眼とかへた」「俺たちは呪ひ、呪ひ、呪ひ、死ぬ」というような具体性・攻撃性の前には霞んで見える。山田自身の迷いが伺える。結局、農村を舞台としたものは後に書くことがなかった。八号の「春」にも子どもの貧困はささやかに描写されるが、やはり「ぼくは子供に戀をする／子供もぼくに惚れる」というように幼い者への愛が先立っており、周囲からは浮いている。

「文藝直線」の方ではどうか。二号（五月）に発表された「感情集りりかる…」（前論にて資料1として添付）は「みなはえらい／ほくはあかん」「みんながまるきらずむの着物をきてしまった／世の中の色が一つになってゆくのかしら、／ほくみたいに変な仮装をしているより／そのほうが人類のために好いのかも知れない」と、周囲がマルクス主義に染まり左傾化していく状況に調和できない自身の立場を詠っている。また「Sollenと Sein とが抱合して／ほく思想を妊んだ」とあるが、ゾレンとザインは哲学用語で、それぞれ『当為』あるべきこと』『实在』あること』である。『あるべき』自分とは、プロレタリア詩を書き運動に参加していく人物だと思われる。しかし現に今『ある』自分は非プロレタリア文学を書き続ける学生である。その当然『あるべき』である青年像、ゾレンの窮屈さを打破するものを求め、「乙女が戀のかはりに／野道へうんこをすれば／ちと世の中も面白からうが。」と詠ったのではあるまいか。「戀」という上品さを捨て、下品な「うんこ」という語彙で逆説的な価値を表現している。

しかしこのような発想も山田の救いにはならなかったと思われる。「木曜島」「文藝直線」同人の詩は、元より上品さとは程遠い次元にある労働者を描いているからである。もちろん、同人に真にプロレタリアートの生活を理解しているものはいなかっただろうし、彼らの詩は多く形だけをなぞったプロレタリア文学だった。しかし問題は、それが山田の目にどう映り、仲間の進もうとする道に加わりきれない自分に、彼が何を感じていたかである。「文藝直線」四号（十二月）に発表した「犬」を読んでみよう。

抱いてくれるひとはない

笑つてくれる少女もない

隣の犬よ、せめて尾をふつてお出で

さあ抱いてやらうな

この淋しい媚よ。

だがぼくは一切のパンも持つてゐない。

お、星みたいなコスモスの花が

こゝにある

これでも喰つてくれ。

はは、口でむしり捨てたね、

美しいばかりぢや腹の足しにはならない、ね。

おまへはぼくより賢明だ

美しく上品なといふばかりで

氷柱みたいに冷いひとを忘れられないぼくよりは、ね。

これも一見、失恋を歌っているものではある。しかし「美しいばかりじゃ腹の足しにはならない」という表現は、芸術だけでは貧困にあえぐ労働者を助けることはできないということを示唆しているようにも見える。見せかけの華麗さを嫌い、排泄物の語彙でそれを脱却しようとした彼のスタイルも、プロレタリア文学の見せる苦痛と憤怒の世界の前では「美しいばかり」のものに過ぎなかった。それは恐らく、山田自身が最も痛感していたことであろう。もはやここにおいて、当初見られたような毅然とした態度は見られない。むしろ惨めさ、情けなさが露出しているのである。

しかし一九二九年になって、もう一度彼に変化が起こる。一月一日、山田は「序曲 ―新しき自らに―」を書いている⁽⁸⁾。「古い世界の溶けていく音だ！／（略）／空に力強いEGOが走る！／俺は一個の宇宙になった！」という壮大なものだ。何らかの決意を示したものに見えるが、それはプロレタリア運動に入る決意だろうか。しかし「EG

〇」はエゴイズムを指し、自身の道を邁進するという意味にも取れる。一月十六日に書かれた「獨白 (A MONO-LOGUE)」⁽⁹⁾にも「ぐん ぐん」と若い友だちが抜いてゆくのに「毛ほどのことで歩行を傷めてゐるのは馬鹿すぎ」と前進の意志を覗かせる。ただし、自殺という結果から見ればそれは変化とは言い難いかも知れない。少なくとも成功した変化ではなかった。詩では力強いことを叫びつつ、人間としての彼は「EGO」を貫くことはできなかったのである。

二月の「文藝直線」六号には「海と海の人に」を掲げている。「重商主義の航路を抹殺しろ」と体制批判的な表現を唯一有するものだが、「ユージンオニール氏に」と副題がつけられており、船乗りの経験を持つ劇作家オニールに影響されたものでしかないだろう。当時のなプロレタリア運動との関連は薄いとと言える。

むしろ彼の姿勢が見えるのは、八号(七月)に載った遺稿「(或る日の生活記録) A PROFILE OF A DAY」⁽¹⁰⁾である。

私はメーデーの行列に壓力を感じながらも、自己偽瞞の夢殿を自動車の中に建て、ゐる。

スロガンの波。意志の流れ。それを取捲くサーベルの輪。歌が飛ぶ！

私は小市民性の耳朵を両手で蓋ふより仕方がない。

「まあ、あんた馬車馬みたいね」

「しっ、歌だ。」

「そんなもの軽蔑してしまえば好い。」

「駄目だ。ぼくには良心がある」

「良心？ ふ、シユミーズほどの價値もないわ」

ヴァイオレットの香が、私の唇に近づく。

私は混乱する。魅惑。エロチイツシユ・ヘゲモニイ。そして私は遂に哀れむべきプチブルの學生である！

詩というよりは散文・小説に近く、メーデーの行列を横目に愛人とキスをするという内容である。この愛人は恋人とは異なり、主人公には「ラジオ恋愛」（一方通行の意か）「磯の鮑の片思い」の相手が存在しているようだ。この愛人的女性が登場する作品は他にも「出發」⁽¹¹⁾があり、その詩には「篠原夫人」という名も出ている。

おるがにずむの旗のみが

マンハッタンカクテルの寢室に

相應しい景物だ

はくと夫人は其旗をいぢくり廻つて

今宵も破つてしまつた。

と、これまでになく官能的な表現が見える。山田に実際、「夫人」にあたる交際相手があったかどうかは不確かである。ただ「花嫁」二号（一九三〇年五月）⁽¹²⁾に池田昌夫が掲載した追悼詩「五月二十日——山田初男が死んだ——」⁽¹³⁾に「傷いた詩人は乳飲児のやうに愛人の胸にすがつた」とある。池田が山田の詩を鵜呑みにしただけである可能性もないではないが、池田は同人の中で比較的「山田と親しかったと思われる人物であり、やはり是と考へて良いのではないか。であるとするれば、その相手は富裕層である可能性が高い（「A PROFILE OF A DAY」では運転手つぎの「キャデラック」に乗っており、「出發」ではカクテル「マンハッタン」を飲んでいる）。そうした人物との自墮落な付き合ひが、山田の憂鬱に拍車をかけたのではないだろうか。

これらの作品群からは、山田の苦悩や心境の変化がありありと見える。毅然とした態度がやがて崩れ、惨めさの吐露へと変わっていく。また運動の高まりに「壓力」を感じたためか、自身のプチブル性を強く自覚していく過程も、こうして作品を俯瞰すれば如実に見えてくる。当時に独特の苦悩だと言えよう。また、前論でも左傾化が急激な勢いで起こったことは述べたが、山田においてもやはり「木曜島」三号と四号の態度の差が大きい。山田は踏みとどまったが、多くの同人が一九二八年を境に変化していったのだ。西村のような詩が指示を得て増加していく中で、山田は一人場違いな詩を書き続け、時折は自嘲的に苦悩を描き込んだ。本来、多様な方向性のある作家が集っていても良い同人誌で、しかも創刊意図にイデオロギッシュな部分が皆無であった「木曜島」「文藝直線」においてこうした立場に置かれる者が出てしまったのにも、当時の特異性を見ないわけにはいかない。

二、詩人としての山田初男評価の試み

この章では、幾つかの作品から、山田の詩人としての評価の可能性を探る。彼の詩が当時、どのような方向性を目指し、プロレタリア文学とはどの程度隔たりを持っていたのか、そして今日的にどのように評価できるのかを論じてみたい。

山田の詩の特徴としてまず挙げられるのが、幼い子どもへの慈愛や憐憫である。「木曜島」二号に次のような詩がある。

【小使徒辨ちゃんに】

道ばたに光った十字架に

うんこをかけた七つの辨ちゃんは

よんべ、酸素吸入の泡を見い見い

天國へ行きました。

黄金色の聖なる装飾を捧げた

あの子は

きつとエス様から

立派な御褒美を頂いているでせう。

「使徒」はキリスト教の用語であり、関学のキリスト教教育の影響があるとすべきだろう。幼くして命を落とした子どもに対する慈愛が込められた詩であり、こうした、子どもを慈しむ目は、その後の作品にも継続されていくのである。前章で挙げた「童謡 村の子供」「春」はその系列である。一九二九年に書かれた「思ひ出」(「5人」二号、三月)には「死んだ良坊の頬べたに／ついでた館の悲しい甘さ」という一節があり、やはり死んだ子どもへの憐憫の情が浮かぶ。子どもに対するこのような視線は、山田自身が両親を失った孤児であったことと、無関係ではないだろう。同人の回想によれば山田自身、近所の子どもに親しまれていたようである。子どもたちの幸せや、死後の冥福を祈る詩は、恐らくそのまま、孤児である彼自身の幸福への祈りである。「春」の「ぼくは子供に戀をする／子供もぼくに惚れる」という一節にあるように、孤児の共感の間に生まれる愛が詩の根底にある。「庭」(「5人」二号)は、

小供は歌を閉じた

小鳥は羽を硬くした

そして雲はどんより通り過ぎる

ぼくが居なかつた午後のこと

と詠っており、「ぼく」＝自身と「小供」「小鳥」の親和、か弱く小さなもの同士の結合によつて初めて「雲」のない晴れやかな美が「歌」えるのだというテーマを持つ。山田が子どもを愛したのは、子どもたちと自己との共感をもつて、孤児であつたために得られなかつた愛を彼らと共有したいという思いがあつたからではないだろうか。

彼のそうした性質を代表する作として、この「小使徒辨ちやんに」は同人たちに印象を残したらしく、追悼文の中でも触れられている。ほとんどの同人が自身の心情や自然の美を詠う中で、山田はこの「小使徒」の死を描き、またその世界観を決して多くない行数に凝縮している。今日的に見ればやはり頭一つ抜け、独自性を持った同人であると言える。

さて、「小使徒辨ちやんに」では、「うんこ」を「黄金色の聖なる裝飾」と表現し、下品な行為を美に読みかえて、死後祝福のあることを祈っている。また、「木曜島」二号にはこの詩と共に「小便」という短詩が掲げられた。「愚かな自慰を／田圃に投げこんで／小便をした。／朗らかな風景を／横ぎつて／寂しい小便をした。」というもので、「小使徒辨ちやんに」の「うんこ」とは対を為す形だが、こちらは「朗らかな風景」の中に一人ある寂しさを、「小便」によつて表している。この「小便」は自身の愚かさを細々と排泄する行為でもある。こうした、下品な表現を積極的に使つていこうとする姿勢も山田の特徴である。

やはり「木曜島」二号の「華麗なる詩人へ」において、

やがてしこ爪やがた

詩的・とやらの琴線をおつとり玩んで

それで高踏的で華麗だそうだと。

やい、毎月、金持雑誌で

月や花や

戀や、人生を

綺麗な淫売婦にしゃがつて！

と憤っていることから見ても、ただ美しい表現で自然や人生を詠む詩には嫌悪感を覚えていたのだろう。だからこそ自身は敢えて汚い言葉を用いたのだと思われる。「小使徒辨ちやんに」と「華麗なる詩人へ」とは一九二七年十一月の第二回創立記念祭で山田本人に朗読もされた⁴⁴⁾。富岡捷は、

彼は、人の憚るやうな汚い事でも、一度美しいと思ひ詰めたら、それを正直に信じきつてしまう程の彼だつたから——何時かの「文科祭」で彼は「うんこをしたら云々」と言ふ詩を、汗みづくになつて、それは全く恐しい真面目さで、令嬢達に朗読んで聞かせている彼の立像をみて……僕は寧ろ慄然とした程だつた。⁴⁵⁾

と述べている（「文科祭」は記憶違いであろう、正しくは「創立記念祭」）が、単に汚物の語彙に注目するだけでなく、「華麗なる詩人へ」に表れた思想的下地をも見なければならぬ。

前章に述べた通り、「感情集りりかる……」にも「うんこ」が登場する。「小使徒辨ちやんに」の逆説的な美意識は閉塞した自己を打破せんとする意識に発展したと言える。この発展の背後には、当時の前衛詩の影響があつたと思われる。平戸廉吉の「日本未来派宣言」（一九二一年）や、ダダイズム、シュルレアリスムといった、既存の芸術の破壊と

革新を志向する思潮の影響を、山田は多分に受けていたはずだ。例えば「感情集りりかる…」には「ダガバジマクワウリ」⁶⁶「DADAをこねてみたら」「辻潤と云ふおぢさんは日本で一番好人だ」⁶⁷などとダダイズムにまつわる人名や表現があり、上田宣への書簡に『詩の消滅』これはシュル、レアリストの一論文の命題である」⁶⁸と書いていることから、それはわかる。また「銅鑼」同人に向けた「支那楽——サトウ・ハチロー君に——」「月夜——草野心平君に——」を書いていることから、「銅鑼」のアナーキズムも幾らか彼に影響を及ぼしていたはずだ。政治的な思想は持たなかったように伺える山田であるが、草野心平のアナーキズム詩に見られる破壊や解放の精神性は受容していたように思える。「感情集りりかる…」と「夢を殺される時」(前論資料2)に見られるフォントの変化を利用した表現形態も、これら同時代の前衛詩運動にならったものである。

山田が詩の副題に冠した文芸関連の人名は、サトウ・草野以外に、北川冬彦、手塚武、ユージン・オニール、宇野千代である。また「感情集りりかる…」に登場する文芸関連語彙を挙げると、「ダガバジマクワウリ」(高橋新吉)「新居格」「まるきしむ」「辻潤」「まるくす」「山田順子」「徳田の爺さん」(徳田秋声)「藤間の小母さん」(藤間静枝)「藤陰静樹」である。新しい文芸思潮のみならず、一九二七年頃に起こった秋声周辺のスキヤンダル⁶⁹までを取り込んでいる。山田は文学にまつわる様々な知識を広く、貪欲に収集し、それを創作に応用する詩人であった。

山田は決してダダ的な詩、シュルレアリスムの芸術を成したわけではない。どちらかと言えばセンチメンタリストであった山田は、ダダやシュルレアリスムにあるニヒリズムも持ち合わせてはいなかった。もとよりそうした傾倒は志向されていなかったに違いない。しかし諸派の要素を取り入れ、自己の詩に還元しようという姿勢は持っていたのではないだろうか。山田が目指したのはダダイズムでもアナーキズムでもシュルレアリスムでもない。それらを参考にしつつも独自の世界観を築くことこそ、彼の創作の方向だったように思われる。「序曲——新しき自らに——」

に詠われた「EGO」とはこのような方向性の再確認の叫びだったのでないだろうか。

山田以外の同人たちのプロレタリア詩は、どれも画一的である。テーマもレトリックも、その露骨さや過激さの大小はあれ、似たり寄ったりのものであった。だからこそ山田はそこに足を踏み入れることができなかつたと考えられる。プロレタリアートの解放を目的に団結というベクトルで創作される画一的な詩は、山田の目指す独自世界には本質的にかき離れたものだつたはずだ。逆に言えば彼が左翼運動に身を投じなかつたのは、漠然どではあれ、かなり当初から自分の進むべき方向が想定されていたからではないだろうか。

しかし当時にあつて我が道を貫けるほどには、山田の精神は強くなかつた。山田は死の直前、自身が「イズム」を持たないことに苦悩していた。多くの友人はマルキシズムに傾いた。また周囲を見回せばダダイズム、アナーキズム、シュルレアリスムなど、「イズム」主義が次々と興つていた。そうした時代と周囲の雰囲気、山田に「イズム」主義を持つことを暗黙の内に強いていた。少なくとも山田はそうした圧力を感じていたはずだ。それに彼は耐えきれなかつた。そこに失恋や家庭問題が重なつた。どれも相応に重い問題であつたはずである。繰り返すが、私は山田が単一の原因で自殺したとは考えていない。しかし文芸思想上の問題があつたとすれば、これまで述べてきたような創作の方向性と、それを押さえつける現実の圧力、そこから「イズムがない」という苦悩が生まれたことだつただろうと推測している。

山田は未だ未完成な詩人であつて、文壇で活躍していた一流の詩人たちと同列に評価することはできない。彼はまだ若く、発展途上だつた。しかし当時の左傾化の気運の中でその画一化の波を避け、独自の世界を形成しようとした彼の才と存在はやはり注目に値するし、「頑なな「子どもへの慈愛」と逆説的な汚物の美、諸派を横断して形作られつつあつた世界観は、今日興味深く読むことが出来る。

ま と め

今回は前論で十分に扱えなかった山田初男の作品をテーマとした。彼の遺した作品には当時の彼の苦悩がありありと浮かび、同人たちが彼の死後に遡及して見直せば、なるほどその原因に文芸思想上の問題を見てもおかしくはない。自殺を脇に置いたとしても、「感情集りりかる…」や「A PROFILE OF A DAY」に見える悩み、自身の方向性と左傾化の流れとの板挟みとなった苦悩は当時ならではのもので、プロレタリア文学運動の悲惨さを感じるのである。運動の中で死んでいった青年たちとは異なる意味で、これもまた時代の暗い一面であった。

山田の文学は、多くが左傾化した同人間においては傍流にしかなり得なかった。しかし今日的に見ればむしろ画一化した他の作品よりも特徴的で才能を感じさせる。殊に下品な表現の発展に関しては、当時の前衛詩運動の影響を受けつつ、アマチュア詩人が自己の創作世界に溶かし込んだ結果として見ると面白い。

このような独自性を持つプロレタリア文学が暗黙のうちに否定され押し潰された一九二〇年代後半という時代、そして当時の学生文化における左翼思想の重さというものを、改めて考えさせられる結果となった。今後はその他の同人、そして関学以外の同人誌にまで手を広げ、調査を続けていきたい。

註(1) 「同人誌『木曜島』『文芸直線』の左傾化と同人・山田初男——一九二〇年代後半 神戸におけるプロレタリア文学運動の一諸相——」(『日本文藝研究』第六十二卷第二号)

(2) 「木曜島」「文芸直線」同人。誌上掲載作としては、リチャード・テームル「労働者」の邦訳(『木曜島』八号)、「交響楽綱領」(『文芸直線』二号)

(3) 「文芸直線」八号(一九二九年七月)の西村欣二「初ちゃんを悼む」で「初ちゃんのマルキシズムへの方向を恋人の前で

- やじつたらしい岡田君」と述べられている。
- (4) 同右の号で弘田競は「単に戀愛のためにのみ彼が命を絶つと考えるには、山田の心理は余りに複雑」と述べた。弘田は山田が孤児であることに触れている。また家庭問題としては、「5人」四号掲載の山田の書簡では、祖父が長く病床に伏せていることが悩みとして書き記されている（以下、書簡はすべて「5人」四号掲載とする）。小坂常男は「文藝直線」八号で山田から「戀愛、家庭、芸術等の問題で僕は最近非常に苦しんでいる」と言われたことを記している。
- (5) 中原敬三宛書簡（昭和三年月日不明）「イズムのある人は幸福だ」
- (6) 「銅鑼」は一九二五年、草野心平が黄瀛・原理充雄・富田彰・劉燧元と共に創刊した同人誌。三号から参加した坂本遼は関西学院出身で山田らの先輩に当たる。坂本を介して、原理がオルグとして「木曜島」に接近した
- (7) 中原宛書簡（昭和三年月日不明）
- (8) 掲載は「5人」四号。遺作として
- (9) 掲載は二月の「5人」一号
- (10) 遺作として掲載されたが執筆時期は不明。また冒頭に「1」とあり、続きがあることを思わせる
- (11) 掲載は「5人」四号。遺作として
- (12) 一周忌に出された山田初男追悼特集号
- (13) 後に池田は池田正樹のペンネームで詩集『自燈』を出版（一九三五年四月 北窗社）。この詩も「五月二十日——自殺せし詩友山田初男におくる——」と改題し収録
- (14) 関西学院図書館所蔵『文学部回顧』（一九三二年一月 関西学院文学会）より、「創立記念祭」
- (15) 「文藝直線」八号より富岡捷「山田初男の横顔」
- (16) 「ダガバジマクワウリ」は詩人・高橋新吉（一九〇一〜一九八七）の『まくわうり詩集』と「ダガバジ断言」に由来か
- (17) 辻潤（一八八四〜一九四四）は高橋からダガイズムを知り、ダガイストを名乗った。
- (18) 上田宣宛書簡（昭和三年月日不明）
- (19) 秋声の女弟子を経て愛人となった山田順子は一九二七年、秋声との結婚直前、当時藤間静枝Ⅱ後の藤陰静樹の恋人であった勝本清一郎のもとへ奔った

●山田初男作品一覧（発表順）

一九二七年（昭和二年）

五月 「支那楽——サトウ・ハチロー君に——」

「新月——北川冬彦君に——」

「月夜——草野心平君に——」（「脱殻」五号）

六月 「淋しいのです」（「淀川に」（「木曜島」一号）

十月 「華麗なる詩人へ」「小使徒辨ちゃんに」（「木曜島」二号）

十二月 「或る左翼藝聯へ」「冬へ」「小便」（「木曜島」三号）

一九二八年（昭和三年）

二月 「童謡 村の子供」（「木曜島」五号）

三月 「春」（「木曜島」六号）

四月 「春 手塚武兄に」（「木曜島」八号）

五月 「感情集りりかる……」（「文藝直線」二号）

十二月 「犬」「お地藏さん」（「文藝直線」四号）

一九二九年（昭和四年）

二月 「海と海の人に——ユージンオニール氏に捧ぐ——」

「冬・海港」（「文藝直線」六号）

「獨白（A MONOLOGUE）——宇野千代女史に——」

「A LAND SCAPE——K子さんに——」（「5人」一号）

三月 「思ひ出」「庭」（「5人」二号）

青年詩人・山田初男とその作品

青年詩人・山田初男とその作品

五四

五月 「晩春賦」〔5人〕三号)

七月 遺作「夢を殺される時」

遺作「(或る日の生活記録) A PROFILE OF A DAY.」〔文藝直線〕八号)

一九三〇年(昭和五年)

五月 遺作「序曲 —— 新しき自らに——」〔出發〕「あの心を!」〔5人〕四号)

(やまもと あゆむ・関西学院大学大学院文学研究科博士課程前期課程)